るものである。最後に「埃及に於ける希臘殖民地」「希臘クリート島の發掘」「エトルスキの遺跡と其の文化」「伊太利の古市ポムペイ及ヘルクラネウムの發掘」「南米美術序說」の優れた長編がある。是等は西洋古典文化の教養を積まれた博士の若き日の述作である。考古學を志す者にとつて、第一教養たる人類文化の發生と西洋古典文化の成立の概念がなほ多く缺け勝な我が學界に對して、早くこのエーゲ海文明やローマ以前のエトルスキーの文明を紹介された事は博士の大きな業績の一つである。なほ附錄に收められた日本石器時代住民論は幼き日の博士の學鋭論難の情熱のこもつたものがあり、博士の處女作「考古材料」に見る南河內國府附近の遺跡は後に京大考古學教室にて學術的發掘が施され我が史前の研究に一時期を劃したるを思ひ併せる時、この著者の論文を通じて感慨深いものがあり、最後の「古代の遺物」の一篇とは博士四十年の學的生涯の兩端をなすものである。

以上本書の內容を瞥見した。羽田博士の序にもその意味の見る如く著者は黎明期の我が考古學界にあつて、今日の我が考古學が發展すべき進路をその短い生涯の中に自ら進んで具現されたのである。而かも獨り自分の好きこのむ小さな領域に局限することもなく、よく人類が生起した活動の全舞臺に及ぼされたのである。まことに博士こそは黎明期の我が學界が生んだ巨星である。いまその業績が斯くの如く、悲しくも博士の遺稿となつて集大成された事は後來の研究者に多くの示唆と新らしい出發點とを與へるものとして、我が學界の等しく之を迎へ受ける處であらう。（菊版、本文六七五頁、圖版六三葉、昭和十四年九月、座右寶刊行會發行定價八五〇）（藤岡謙二郎）

東京城 ―渤海國上京龍泉府址の發掘調査―

東方考古學叢刊　第五册

東亞考古學會

本書は、東亞考古學會が、昭和八、九兩年に亙つて行つた渤海國の首都上京龍泉府遺址の發掘調査の報告書である。

東京城といふのは、滿洲國牡丹江省寧安縣下の一小都邑で、すなはち遺址はこの地に存在するのである。渤海國はわが文武天皇の御代に大祚榮によつて建てられ、今の東部滿洲から、露領沿海州、朝鮮の咸鏡北道をふくめた地方を版圖とし、支那においては唐及び五代の後梁、後唐と時を同じうし、わが國においては、奈良、平安兩朝に亙り、契丹に滅されるまで、十五代二百七十餘年の命脈を保つた。渤海國を組織したのは、高勾麗の遺民と靺鞨人であり、渤海國以後に於て滿洲に國を建てた遼や金や近くは淸朝などとはちがつて漢人參劃といふことは認められないにもかゝはらず、文獻に傳へられる渤海國は高度の漢文化を攝取してゐて、その意味で、唐史はこれを海東の盛國と稱してゐるのである。またわが國とは、聖武天皇の神龜四年以來三十五回に上る修交の事實があることは周く人の知る所である。

ところが、淋しいことには、渤海國は自らの記錄を殘してをらないので、支那及びわが國に傳へられてゐる記錄によつて、その

盛んな有樣を窺ふに過ぎず、その文化の闡明は實に考古學的調査に俟つよりほかに途はないのである。

渤海國には上、中、東、南、西の五京の設けがあつたと記されるが、そのうち、大概首都となつてゐたのはこの上京龍泉府で、幸にもこの遺址だけが文獻の上からも今の東京城にのこつてゐる故城に比定せられるし、明治四十三年わが白鳥博士がこの地を訪れて以來、京城帝大の鳥山喜一教授、鳥居博士、ハルビン博物館の露人ボノソフ氏等の踏査によつて渤海時代のものと推定される遺物も將來せられ、遺物の點からもこの地が上京址であることが確められてゐたので、この地の踏査が計畫せられたのであるが、滿洲國の成立によつて愈々その實現を見るに至つたのである、と本書の序說は述べてゐる。

本報告は、調査主班の東大教授原田淑人博士と、駒井和愛氏とが、調査に參加した村田治郎博士や、水野清一、三上次男、矢島恭助氏等の手記及び實測圖をもとゝして周到なる態度をもつて編纂したものであり、本文九〇頁は、序說　調査の經過　遺蹟（一、外城遺址　二、內城遺址　三、宮殿址　四、寺址　五、自餘の遺址）　遺物（一、瓦磚　二、石獅子頭　三、建築金具　四、兵器　五、陶容器　六、佛像　七、和同開珎　八、雜具）結論に分れ、八〇の挿圖、一二〇の圖版、三葉の附圖（そのうち渤海國上京龍泉府址全圖、宮城址圖は踏査に參加した關東軍陸地測量部の片野彌一郎、黑田一雨氏の作製した精圖である）よりなつてをり、英文解說及びボノソフ氏の踏査報告をそへてゐる。

就中興味ぶかいのは、この故城が、東西一里强、南北一里弱の外城の北邊中央から稍西に偏して內城がありその北部は歷然として宮殿の區分をなし、內城の南門址から外城の南門址に至る間を走る、朱雀大路にも比すべき四十八間餘の大路が現存して、これによつて外城を東西の兩區に分つてゐて、唐の長安のプランを偲ばしめるといふことはいはずもがな、今回の踏査によつて、その大路をはさんで東西に相對してゐる六個の佛寺址が見出され、その踏査によつて佛教がさかんに行はれた有樣を明かにし、そしてそれが唐や、わが奈良平安南朝、朝鮮新羅朝とおなじ佛教藝術圈內にあることを確め得たことである。また、現在畑中を通じてゐる里路や石垣などによつて、東西兩區は各々四十一坊に分れてゐたと推定し、東區に存する現在の東京城市街（人口三千）が東市の遺存擴張せられたものであらうとしてゐるのは、都市プラン研究上注目すべきことであらう。

內城中央に南から北に並んで存在する六つの宮殿址においては第四宮殿址廻廊から礎石の上に漆喰をもつて固められた綠釉の瓦製柱座が發見せられ、附近より木柱に使はれたと思はれる鐵釘も出土し、そのうちには朱の附着したものがあることによつて、木柱は朱塗であり、朱塗の柱に綠釉のかゝつた柱座との配色の美を髣髴せしめたこと、第五宮殿址において統の遺制を知り得たこと、さらに又、わが國との修文の事實を何ものよりも雄辯に證明する和同開珎の出土等は、われ〳〵の目をひくのである。

寺院址においては、大路の東、今日南大廟とよばれる廟內に現

存する渤海時代の熔岩製の八角の石燈の、地下に埋れた基壇の周圍を掘り下げ、雄渾な蓮瓣狀の匂欄間を發見し、その總高一丈九尺許ある堂々たる姿を、寫眞し、村田博士の手によつて實測圖をつくり得たことも、この報告に輝きを副へてゐる。その他の遺蹟遺物については、一々言及し得ないが、すべてに唐の文化の影響が濃厚にみとめられるなかに、宮殿寺院の軒端に修飾された瓦瑞の蓮華文に、唐の影響よりも高勾麗のそれが強くみとめられることは、この國の支配階級が高勾麗人によつてしめられてゐたことから當然推想せられることながら、看過できない重要な事柄であらう。

堂々たる大書册は、盛澤山に、渤海文物のそのまゝの姿をわれ〳〵に教へてくれる。本書は、渤海文化の研究に、その基礎を與へた、といふことに無上の價値をみとむべきであらう。遺物は現在では滿洲國立奉天博物館に保管せられてゐることを申添へて筆を擱く。(昭和十四年三月、東亞考古學會發行、四六四倍判、本文九〇頁、挿圖八〇、圖版一三〇、附圖三、定價參拾圓)(外山軍治)

紹興古鏡聚英

梅原末治編

支那の古鏡鑑は古代世界に於ける金屬鏡として、最も顯著な發達を遂げたものであつて、その蒐集と愛玩の風は既に早く宋代に興り、清朝に入つては銘文の方よりする學術的研究をも見たのであつたが、進んで之に科學的研究を加へ、考古學上より時代による形式の變遷を攷へ、又質料に考察を及ぼして、支那古鏡の有する特性を明かにし、所謂鏡鑑の學を組織づけたのは、故富岡謙藏先生をはじめとする大正年間の我國學者の業績によるものである。

然るに、これらの研究は各々の鏡式別に型式學的考察を加へ、又年號鏡を最もよるべき根據としてその實年代を推し鏡鑑一般に之を及ぼしてその沿革考をうち立てたものであつたが、その資料とされたものは本邦古墳出土の舶載品か或は古美術商等の手を經たものであつて、支那の考古學的資料としては直接の、生のものではなく、それだけに研究上種々の不備を來たして居る。例へば各鏡式の相關關係に於いて種々の論議を惹き起して居るもののある事や、又年と共に加はる新しい考古學上の事實によつて「チエック」されつつある點も存する事である。蓋し、かゝる一等資料の缺亡なる事實は、彼の形式學的考察と共に、考古學研究に於いて最も重要なる一面、即ち遺物の出土地乃至伴出物にもとづく考究を不可能ならしむるものであつて、支那考古學の通弊とも言ふべく、今なほその發達を甚だしく阻みつゝある。編者梅原博士はこの弊を救ふべく常に多大の苦心を拂はれてフンド(一括遺物)の檢出紹介に勉められつゝあるが、本書もその一つとした鑑鏡研究に基本的な事實を提示する點で注目すべきものがある。

扨、本書の收むる處は、昭和十一年の五、六月頃から注意に上つて來た浙江省紹興古墓の出土と傳ふる古鏡類の主なもの六十餘面であつて、その殆どは鑄上りの極めて良好な畫象鏡であり、他